



## 夢は大きく

戸倉仁一郎\*

昔、といっても18世紀のことですが、徳川綱吉の没後、甲州から大和郡山に移封された柳沢藩に柳沢里恭という家老がいました。柳沢淇園と号し柳沢里恭とも名乗った才物で、武芸はもとより和漢の学に通じ、特に花鳥画を書いては一流でした。また日本人画の開祖、池大雅の恩師であり、パトロンでもあったことは有名です。

この人は秦の孟嘗君のように食客が好きであったので、大勢の人が出入りし、その上放蕩も嫌いではなかったため、さすが家老5千石の家計も楽ではなかったようです。そんな人ですから情報も豊富で早く、天下の形勢に通じておりました。ある時、一大工事を思いつきました。それは本州を横断して日本海と瀬戸内海をつなぐ水路の開設です。今の兵庫県で姫路へ南下している市川と、豊岡へ北流している円山川をつなごうというものです。二つの川は何れも生野高原を水源としており、生野峠はその分水嶺であります。

もしこの計画がうまくゆくと、松前、秋田、新潟などから大阪、京都へ送る米その他の物資輸送は馬関海峡を経由する必要がなく、当時としては画期的な大事業となっていたと思います。

この計画は結局、金策でゆきつまり画餅に帰したと記録されています。里恭も借金の穴うめに困ったようです。もしこの水路ができていたとすると、レセップスのスエズ運河開通(1869年)よりも100年以上も前にこの土木事業ができていたこととなります。そして日本の歴史や徳川幕府の運命もかわっていたかもしれません。

さて、この計画はお金の面だけで失敗した

のでしょうか、そうとは考えられません。今の兵庫県の神崎町の北部と生野町の南部をつなぐ水路のトンネルを作る技術がなかったからであろうと思います。基本的な考え、あるいは基礎研究がいかにかに立派でもこれを実現するには Engineering や Technology がなければ成功するわけがありません。

絹もゴムも人間の手で作れるようになり、潜水艇や航空機の出現、地球の果てはおろか月世界まで行けるといふ今日、若者の夢が減ったと嘆く人がおります。動乱の時代が過ぎ人間社会の秩序が恢復し世の中がゆるぎない職階の下に運用されるようになると、若者の青雲の志が挫折するのではないかと説く識者もおります。しかし私の考えますところ、いまの文明社会でこれでよいというものは一つもありません。この世界には無限の謎があり無数の解決をせまられている問題があって、チャレンジングな若者を待望しています。エネルギー、資源、食糧、生命、等々魅力あるテーマは無数にあるのです。夢は限りなく、そして大きくあって欲しいと思います。



\*戸倉仁一郎 (Niichiro Tokura), 大阪大学工学部応用化学, 教授, 工学博士, 有機工学化学